

猪の話（三話） = = = 三州横山話より

猪のソメ（案山子）

秋の彼岸過ぎから、猪が田や畑へでて作物を荒らすと言って、山に沿ったところには、頑丈な柵や陥穽や、長い堀などが造ってありましたが、私が物心覚えた明治二十八年頃なども、山峡の田圃へ稲を喰いに出ると言って、そこへ作る稲は、猪の食べにくいように、特に鬚たくさん種類を作ったりして、いろいろと防ぐ工夫を考案したものでした。藁人形のソメぐらいでは猪の方で承知していて、さらに感じないので、材木の片端を穿って穴を造って、木の中心へ心棒を通し、水車の出来損ないみたいなものをこしらえて、これに笕で水を流しかけて、水が穴に満ちると、重量で下がって、水を明けてしまって、材木が旧の位置へ返るとき、片端が後ろに置いてある台の板を、バタンと音して打つ仕掛けなどもありました。これをポットリと言って、昔はこれに杵をつけて、粟や稗を搗いたものだと思います。これを田の傍らの沢に設けておきました。



また自分たちが石油の臭いが嫌いなところから思いついて、これをボロに浸して竹の先に結びつけて、畔に幾カ所も立てて、これなら如何な凶々しい猪でも、臭いの閉口するだろうなどと言いました。臭いものではこの外に、女の髪の毛を燃やして竹に挿んで立てたり、またボロを縄になって、その端に火をつけて、一晩、きな臭い匂いを漂わしておくのもありました。

カンテラに火をともして、高く竿の先に吊るして、暮れ方から夜の明け方まで、田圃の中に灯しておくのもありました。

来る晩も来る晩も灯して置いたら猪の方で覚えてしまって、カンテラの点っている傍で稲を食べて行ったなどという話もありました。

矢トーと言うのは昔からやったことだそうですが、青竹を三尺ほどの長さに切って、先を尖らせて火にあぶって一層鋭くして、猪の来る路へ、矢来のように立てて置くものでした。これに猪がかかって、五寸ほど血を滲ませておいて行ったのを実見したことがありました。

シシオドシ

私が覚えているのは、祖父の亀作が、孟宗竹で作ったものです。後ろに置いた石を打つようになっていて、夜中に5分おきくらいに、コツーン、コツーンと音がしていたのを思い出します。

昔から行ったことで、完全に効力があつたのは、田から田へ鳴子を引き渡して、田の畔に晩小屋を造って、毎晩そこに寝泊りして、炉に向かってホダを燃しながら、夜通しその綱を引いているものでした。近い頃、字相知の入りというところの田圃へ毎晩この鳴子の綱を引きに出ていた男が、たった一晩風邪を引いて番小屋を休んだら、その晩に猪が出て、一度に稲を食べられたなどと言いました。



雨夜を好む猪

猪は闇の夜を好んで出ると言いますが、ことに雨のそば降る夜などは、彼らの書き入れ時だと言います。

用心深い猪

猪は田圃へ近づいてからは、ごく静かに用心深く歩いて、崖を飛び降りたり、堀を越したりするときのほかは、めったに肢音を立てぬと言います。矢トーなどにかかるのは、崖などを飛び降りるときかかるのだと言う人もありました。また田圃へはいるときでも、田圃に最も近い茂みの中から来ると言います。たとえそこが大変な廻り道でも。

最近、猪と猿の害が特にひどくなって困っています。当時のように夜通し番をする訳にもいかず、ラジオをかけたり、爆竹を鳴らしたり、番犬を繫いだり、いろいろするのですが結局最後には慣れてしまいます。触れるとショックが来る、この電気柵が効果があって、今では殆んどの田圃に柵があります。

(柵が無い田圃に這入られる)